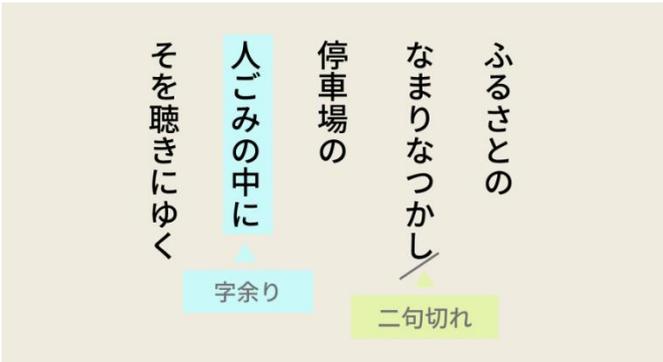


短歌 | 解答・解説

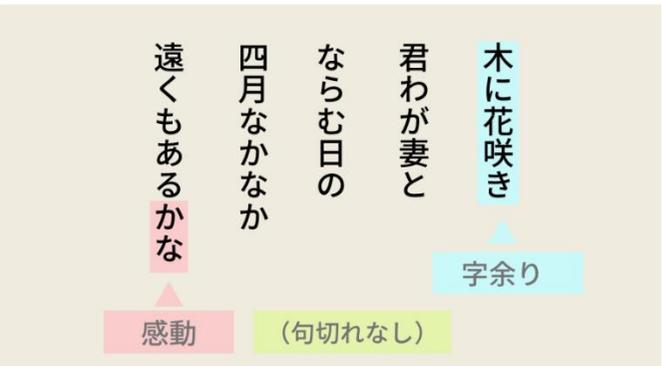
①



この短歌は「ふるさとの訛なまりがなつかしい。だから、駅の人ごみの中にそれ（ふるさとの訛）を聴きに行く。」という意味です。

二句目の「なつかし」で文章が切れているので、「二句切れ」ということになります。また、三句目の「人ごみの中に（ひとごみのなかに）」は八音あるので「字余りの歌」です。

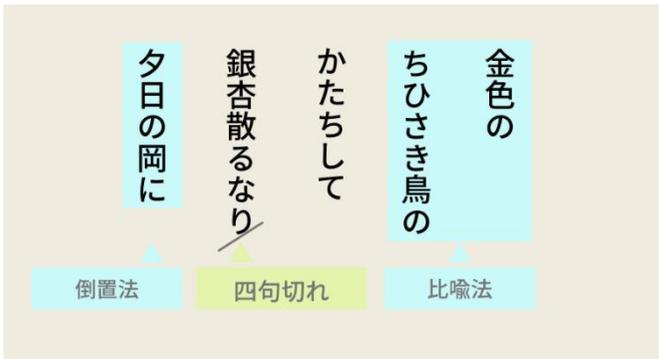
②



この短歌は「木に花が咲き、君が私の妻となる四月はなかなか遠く先のことを感じるものだなあ。」という意味です。

句切れはありません。一句目の「木きに花はな咲さき」が六音で、字余りになっています。

「短歌の読み方」で書いたように、「かな」というのは作者の感動を表しています。「四月が待ち遠しいなあ」という、作者の気持ちを読み取りましょう。



「金色の小さな鳥の形をして、銀杏の葉が散っている。夕日に照らされた岡に。」という意味です。「散るなり」で意味が区切れており、「四句切れ」となっています。

この短歌のポイントは、二つの表現技法が用いられていることです。

一つ目は**比喻法**です。「金色のちひさき鳥」は銀杏の葉っぱのことを表しています。この比喻表現により、葉っぱが軽やかにはらはらと散る様子を想像することができま

す。

また、「銀杏散るなり 夕日の岡に」というのは、本来なら「夕日の岡に 銀杏散るなり」という順番になるはずですが、ここでは、あえて順番を逆にする**倒置法**により余韻がもたらされています。

この短歌は非常に美しい情景を読んだ歌です。具体的な様子まで想像しながら読めるといいでしょう。

俳句・解答・解説編

①

松尾芭蕉の代表的な俳句の一つです。

初句の「や」が切れ字であるので「初句切れ」になります。

また、最後の句が「水の音」という名詞になっており、**体言**止めの表現技法により余韻が持たされています。

季語は「かはず（蛙）」で、春の季語です。



②

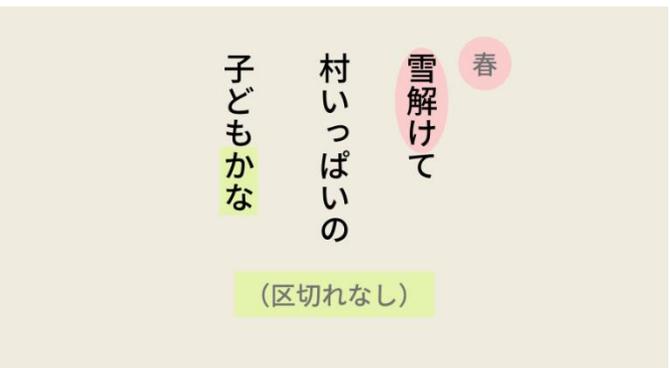
「雪解けて」という言葉からも分かるように、この俳句

は**春**の句です（季語は「**雪解け**」となります）。

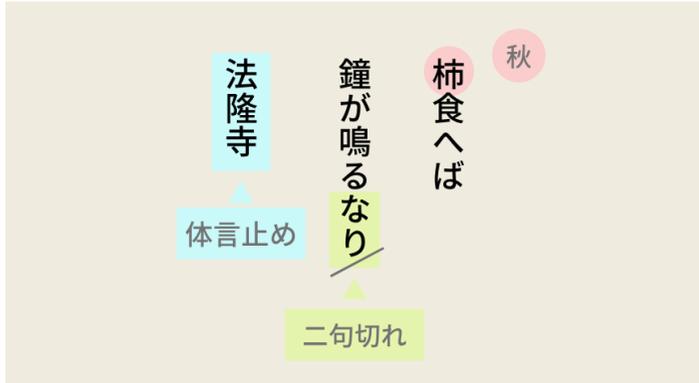
三句目の「**かな**」は**切れ字**であり、作者の感動の中心が

「子ども」にあることが分かります。春の訪れを喜び、外ではしゃぐ子どもたちの様子が思い浮かんだのでしょうか。

（ただし、三句目に切れ字があるので「**句切れなし**」ということとなります。）



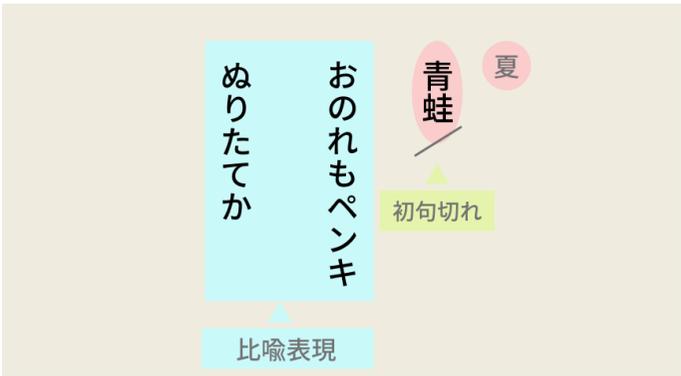
③



二句目の「なり」が切れ字で、「二句切れ」の句です。また、**ハ**の俳句と同じように「法隆寺」という名詞で終わらせる**体言止め**を用いることで余韻を持たせています。

季語は「柿」で、秋の季語です。柿を食べ秋になったことを実感した様子が表現されています。

④



①と同じく「蛙」という言葉が入っていますが、「青蛙」は**夏の**季語です。

この俳句で注目したいのは**比喻表現**です。「青蛙」のピカピカと光るすがたを「ペンキ塗りたて」という表現にたとえています。この比喻により、蛙の色やツヤをよりはつきりと想像することができます。